

「連環記」 其ノ二 (幸田露伴)

保胤が寂心となつて三年後、彼を頼つて出家して寂照と名乗つた弟子がゐた。寂照、元の名は大江山河守定基と云ひ、文章博士や大學頭を數多輩出した名門大江家の一員であり、自らも學問詞才に優れた拔群の器量の持主でもあつたから、若くして三河守に任ぜられたが、ふとした事で三河は赤坂の長者の許にゐた力壽といふ美女を知り、「心魂を蕩盡されて終」ふ。定基の妻は嫉妬の炎を燃やし、夫婦仲が險惡となり、懸念した定基の従兄弟で高名な學者の大江匡衝及びその妻にして「女歌人の中でも指折り」の才女たる赤染右衛門が二人掛りで定基を説得し、力壽を思ひ切らせようとするが、却つて定基は頑なになつて、結局妻を捨て力壽と共に暮すやうになる。

處が、いつともなく力壽は患ひ始め、美しい花が萎れゆくやうに衰弱して行く。定基は狂つたやうに療治法を探し求め、力壽も苦い藥を「強いて嬉しげを裝ふて飲んだ」が、一向に効驗は無い。定基は泣けて泣けて仕方が無い。やがて力壽は死んで了ふ。が、定基は屍體を棺に納めて葬る事が出来無い。幾日が過ぎても面ざし猶生けるが如き屍體の傍で時を過し、古傳によれば、或時、吾が口を死人の口に近づけて「口を吸ひたりけるに、あさましき香の口より出來たりけるにぞ、うとむ心いできて」、

遂に葬つたのだといふ。

その後、空虚な思ひに沈む定基の領地三河に於て「風祭り」なる例式があつた。生ける野猪のみしを殺し生贄いけにへとして神に獻じ暴風の被害を免れん事を祈るのだが、列席してゐた定基に生ける雉子きじを獻じた者があり、定基の命によつて奴僕めぼくが酷ちぢくもそれを眼前でむしり、涙の目をしば叩き苦しみ足掻く雉子あがを炙り焼きにして喰らつた。それをつく／＼と見てゐた定基は、遂に堪へ兼ねて聲を立てて泣き出し、三河守も何もあらばこそ、這々の體ていで都に走り、官職位階は皆辭して了ひ、寂心の許に至り出家して寂照となつた。

入道後、寂照は「たゞもう道心を持し」て只管修行ひんずるに勵み、師の寂心は固より寂心の友にして「往生要集」の著者源信に導かれ、「學徳日に進んで衆僧に仰がれ」るに至り、やがて源信の命により宋の高僧智識に教義上の疑問を質すべく渡宋する。宋でも寂照は崇敬を集め、天子もその學徳才能に感嘆して圓通大師の號を賜り、宰相の丁謂ていゐにも深く遇され、丁謂に望まれて唐土たうどに留まり、三十餘年の後、「莞爾くわんじとして微笑して終つた」といふ。

定基が死人の力壽の口を吸ふ件りについて、「愛も癡もこ、までに到れば突當りまで行つたものだ」と露伴は書いてゐるが、愛慾に限らず、宗教であれ學問であれ藝術であれ、「突當り」の極端、「斷岸絶壁」の極端に迄生の諸相を見極め、それを「造物の脚色」(「運命」)即ち歴史に生起する奇なるドラマと

して表現するのが露伴であつた。「春の夜語り」なる一文に記されてゐるやうに、人間の生の全體を把握せんとするならば、「心靈的」な面と「動物的」な面との「兩極端を包含し得る解釋が、眞を得るに近い」と信じたからに他ならない。昭和十三年、木下杢太郎は「露伴管見」にかう書いた、「現在在東洋古典を講究する學者は少くはないが、それらの人々は多くは一部門の専攻家である。オンネット・オンムとして之を身に着けた人は甚だ罕まれである。恐らくは我露伴唯一人であらう。さういふ人が現在に生きてゐるといふのは、六百年の滝の櫻が今年も花を咲かした如くである。我々は感嘆に次いで研究をしなければならぬ。「オンネット・オンム」とは十七世紀フランスに於ける理想的人格像で、全人的な知識と繊細かつ確實な趣味とを有する卓越せる文章家の事を云ふ。(露伴全集第六卷、岩波書店)